



# FUKUSHIMA



**2015 年度震災復興応援ボランティアツアーin福島**

東日本大震災後、ボランティアセンターでは、岩手県と宮城県で活動を行ってきました。震災後4年半が経過し、少しずつ復興が進み、必要とする支援も変化してきました。しかし、福島県では、未だ3.11のまま時が止まっている場所もあります。そこで、今年度は福島での復興を応援するツアーを企画しました。福島での現状を知り、自分達にできることは何なのかを考え、今後継続的な支援を企画、実行していきたいと思ひます。

- ◆ツアー行程
- 9月16日 いわき市 いわき市コットン畑にてボランティア(P.1)  
いわきおてんとSUN企業組合視察(P.2)
  - 9月17日 檜葉町 ふくしま浜街道・桜プロジェクト訪問(P.3)  
富岡町 富岡町視察(P.4)
  - 9月18日 南相馬市 農家民泊、地元の方と交流(P.5)  
仮設住宅にてボランティア活動(P.6)



# 1日目 オーガニックコットンプロジェクト

オーガニック  
コットン  
とは!?



コットンとは?

実から取れる綿皮を衣類などに利用する植物です。  
Tシャツや、タオル、布風などにも使われています。  
綿皮の中には32粒もの種が入っており、  
綿皮の収穫にはコットンの周りの  
葉が枯れていることが特徴的であり、  
ふわふわしている場合は収穫可能です。

オーガニックコットンとは?

オーガニックコットンは、3年以上農業科  
学肥料を使わない土壌で自然に由来する  
原料で作った有機肥料のみで栽培され  
たコットンです。今回、体験畑には  
日本在来種の備中茶綿を栽培しています。

コットンを  
始めた理由

コットン始めた理由

福島では震災による津波により畑に  
海水が染み込み作物が育たなくなりました。  
秋、原発事故の影響もあり、風評被害  
から食用の農作物が売れず、農家が仕事を  
続けられなくなり、多くが耕作放棄地にな  
りました。そのため放棄地対策として食用では  
なく、塩害に強い「綿(コットン)」を育てること  
にしたのです。

コットン畑での  
作業体験



春 種まき

梅雨入り前、5月中旬頃から  
種まきをします。種まきから  
1週間~10日ほどで発芽します。  
(草刈)

除草剤を使用しないので  
常に草取りをします。  
生長しやすい環境を作ります。

夏 開花

レモン色の花が咲きます。  
咲いた日の夕方には花は地上に  
落ち、残った部分はコットンボール  
になります。

秋 開葉・収穫

成熟するとコットンボールが  
はじけ、中から綿毛が顔を出し  
落ちないうちに収穫します。

冬 綿繰り

収穫した綿花を綿繰りという  
作業で種と綿を分離します。

製品のづくり

コットンバグや日本古来の  
糸紡ぎ(紡績機)での糸作りなど、たくさん  
の人の手作業でひとつ  
ひとつ丁寧に商品を  
仕上げています。

コットン畑での作業体験は雑草取りと  
コットンの収穫を行いました。  
一コマの作業が糸田く30人以上でも淹く  
時間のかかる作業でした。ですが、何かと育てる  
喜び、育てたものを収穫する喜びを体験する  
ことでできたのです。また、今回の体験を通し  
福島の農業に誇りと持ちつづける農家の  
方々の想いを感じることもできました。

コットンブランド  
『ふくしま潮目  
-SIOME-』

コットン畑での作業体験で収穫したコットン  
は綿繰り機で種と綿を分けられる。  
分けられた綿は糸車やからぼうきという  
道具で製糸される。この糸の過程を経て  
Tシャツや手ぬぐいなどに織り込まれ  
ていきます。『ふくしま潮目-SIOME-』の商品  
には、いわき市の農家を中心に、2012年より  
栽培・収穫を始めた国産の茶綿を  
採用しています。日本の在来種である茶綿は、  
他の品種に比べて綿が小さい。夜にわずかな  
収穫できない大変な綿です。素材その  
もの豊から生かされる生成りの濃みは茶綿がら  
いの特徴であり、染めでは決して表れない  
自然本来の風味です。



# おてんとSUN

## 企業組合とは

【おとし】 食用ではなく有機栽培で育てる。地域に活気と仕事を生み出すことが目的。

## いわき市



東北地方内では日照時間が最も長い。また年間の寒暖の差が小さい。スパリゾートハワイアンズなどの観光施設もある。

## いわき復興

## プロジェクト

いわき復興プロジェクトとして松本文さんの話を聞いた。

## 株式会社47 PLANNING

「全国47都道府県を、"食"と"文化"を使って元気にしていきたい。これを、スローカンに2009年に設立。震災後、炊き出しを行なったが、費用面、やりりの困難さを痛感。必要なのは、被災者と支援者の両者に利益が生まれる長期的な活動と考え、被災者による飲食街「夜明け市場」を設立。

この夜明け市場とは被災して店舗をなくした人やいわきを盛り上げようとイターンやUターンしてきた人たちによって



オープンされた復興飲食街である。このプロジェクトにより地域の活性化や売り上げを伸ばし大きな規模で移転オープンする店舗も出てきている。

いわき市

## 電源CAR「おてんと号」

自然エネルギーを体験型で学べる移動式教室としてつくられたのが「おてんと号」です。天ぷら油を使用した精製発電や、手づくり太陽光発電体験、ソーラークッカー調理体験などエネルギーについて身近に感じながら楽しく学ぶことができます。



松本文の講演の様子



松本文 さん

1982年 福島県いわき市生まれ  
株式会社夜明け市場 取締役、  
NPO法人TATAKIAGE Japan 共同理事長  
東北大学建築学科 卒業  
2011年10月 東京からいわき市へUターン

## NPO 法人 TATAKIAGE Japan

福島で飲食業を始めようとする方のサポートしているのに対し、NPO法人TATAKIAGE Japanは飲食業以外をサポートすることで福島の課題解決を加速させ、日本の未来を担う人材を福島から輩出することを目的に設立された。

2日目

# ふくしま浜街道・桜プロジェクト



ふくしま浜街道・桜プロジェクトとは  
東日本大震災により避難されている方々が故郷に  
戻ってきたときに、桜が咲き誇る街道で迎えたい  
という思いからこのプロジェクトは始まりました。  
福島県浜通りの国道6号線沿いなどに桜を  
植える活動です。

今回のツアーのメンバーで  
桜の木(1本)のオーナーになりました。  
メッセージプレート  
普通が普通であることを感謝  
数年後この桜木で満開の桜が  
見られますように



桜プロジェクトの始まり  
西本さんは、東日本大震災が発生する以前に、地球の活動の一環  
として、地元の高松市と共に浜街道に桜の木を植えていました。  
桜の木を植えるという機会は、地元の高松市に訪れることが  
でき、地元の高松市は津波に遭ってしまいました。  
西本さんは、浜通りを桜でいっぱいにするという高松市との約束を  
果たすため、震災後も活動を続けました。  
国道6号線沿いに桜の木を植えることに、県から反対され  
ました。国交交通大臣に直談判し、桜の木を植えることが  
認められました。

楡葉町

このプロジェクトの中心  
にいらっしゃるのが、  
ハッピーロードネット理事長  
の西本由美子さんです。

このプロジェクト  
に携わる子ども  
たちは桜並木をいつか  
世界遺産にすることを  
目標にしています。

日本サッカー協会から  
支援を受けており、  
サッカー日本代表の足形  
が展示されています。

一口1万円  
で桜の木のオ  
wnerになれる。  
オーナーになるとメッ  
セージプレートが桜の  
木に掲げることが  
できます。

現在復興のシ  
ボにして  
ふくしまの桜並  
木と目指しています。

## 西本さんの講話



涼やかならに話して下さる  
桜プロジェクト実行委員長  
西本由美子さん

## サッカー日本代表の足形



楡葉町にはサッカー日本代表が  
合宿を行っていたジビレッジが  
あります。原発事故後は事故  
対応の中継基地として使用  
されています。

## 集合写真



# 原発被害に遭った双葉警察署

## ○被災地での警察の仕事

- ・避難所などのパトロール
- ・空を巣や野生動物への対策
- ※現在、双葉警察署は、原発  
被害に遭い、行く事ができなくな  
ってしまっ道の駅などは拠点にして

## ○震災当時の警察の様子

災害時、住民の安否確認、  
遺体安置所の管理、放射  
線量測定などを行って、こ  
常に最前線で活躍して  
いました。

## 除染作業員と地元住民の圧力

現在、双葉町には多くの除染作業員がいる。  
除染作業員は、地元住民の人口よりも多い上回っている。  
そのための圧力が発生している。双葉町の町内には、原発の被害  
を受けた地域は、「見えない治安」が存在している。  
殺人事件なども発生し、桜並木以外の西本さん、藤田町と歩  
いている時に、作業員に声かけられ、怖く感じたと話さ  
れた。作業員と地元住民の関係改善が最優先の課題  
となっているが、現在の福島である。

## 署長の講話



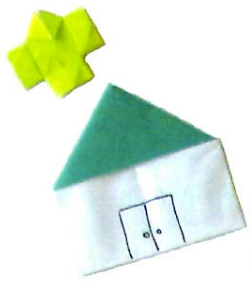
## 仙浜 パトカー物語

地震直後、仙浜沿岸で2人の警察官が、  
パトカーに乗り避難誘導していた。2人は  
津波に到達する前に地元住民に避難を促  
すが多くの命を失った。津波に流された  
パトカーは、津波に流された。今は、  
津波の被害を示すパトカーの記念館に  
設置されている。

## 津波被害に遭ったパトカー







# 農家民宿ガイド

## Good Point

おいでよ!!  
福島



● アットホーム

● 動物がいっぱい

● 実家に帰ったような  
安心感

● 緑がいっぱい

● 自然がいっぱい

● ご飯がおいしい

### 森林 もりりん

森林(もりりん)はこの民泊の守屋さん  
のお家の娘さんのニックネームから来りました。  
高台にあるため、空が近く感じられます。  
玄関に入るとすぐお庭の外のあおむさんが迎え  
入れてくれました。ビールを出してくれた  
お父さん、ご飯のお世話をしてくださったお母さん。  
そして、かわいらしいお兄ちゃん、お姉ちゃん、おいしいおま  
けに炊飯器  
は毎日使  
なりました。  
お母さん  
と一緒にお  
しゃべり  
しました。



### かざぐるま

西沢さん  
お話し

栃木県出身の方で福島に  
震災の4ヶ月前に移住  
して来たそうです。  
西沢さん宅は東に被害が  
たつと2日後に津波の被害を  
見ると深く感じた  
そうです。

2日目はいろいろと所々案内していただきました  
①相馬野馬追  
下津川会場  
でした!!!  
重要無形民俗文化財  
400騎以上の行列、甲冑競馬、  
神輿争奪戦を観ることができ、  
震災の年に行われたそうです。

②又巻山の石仏  
③一本松

一本松のそば  
にありました!!!

東北地方で最も古い石仏  
最後の一本松と観た。  
数百年の松の木が倒れたが、  
31日の津波に倒れたと成り  
ました。現在は一本だけ残り  
希望のシンボルとしています。

### 翠の里(みどりのおと)

農家民宿だけれども、農業よりも  
料理好きのおかみさんによるリス  
トランがメインで、食事が豪華!!!



落ち着いた古民家ほら  
ではのんびりとぬくもり  
が自慢です。

ご夫妻は、九州出身の方で、10年前に  
福島に移住したそうです。震災当時  
海側から避難してまた人々をおむ  
すびで暮らしたそうです。

### 農家民宿 だいちゃん

●バトlemからの留学生をホームステイ  
元で受け入れた。これがきっかけとなり  
2010年に正式オープン。お母さんの漬物  
がウリ。監修体験もできる。

だいちゃんには海が近く、自分達の  
田畑は水が溜まっています。  
人々を受け入れて泊めてあげると  
こころも様々苦言や  
問題があった。



それと私に受け入れ  
お話しを聞いて、それ  
たお母さんのお漬物  
あつた人でした!



### 木のふるさと

～森やぶ子さん夫婦が経営～

料理がおいしい  
自然の里  
0120-123456789  
夜は静かなのでお静かに  
お寝なさい。お母さんの  
お漬物はおいしいです。  
お母さんの漬物はおいしい  
です。お母さんの漬物は  
おいしいです。お母さんの  
漬物はおいしいです。

お母さんの漬物は  
おいしいです。お母さん  
の漬物はおいしいです。  
お母さんの漬物は  
おいしいです。お母さん  
の漬物はおいしいです。  
お母さんの漬物は  
おいしいです。お母さん  
の漬物はおいしいです。

3日

# 仮設住宅にて!!

南相馬市

## ★ 仮設住宅自治会長さんのお話

### 震災直後のこと

- 小高区では、1年間人が入れず「空白の時間」があった。
- 小高区に戻ろうとしている人 1,170人  
→しかし、全体として1割しか戻っていない  
(高齢者の方が多く、若者は少ない)  
理由として、まともに生活できないから。



### 仮設住宅

仮設住宅に入っている人の多くが高齢者である。  
一人暮らしの人は四畳半の部屋に生活している。大変な思いをしながらも、集会場に来てカラオケや輪投げをするなど明るく過ごしている。

## Q & A

Q. 仮設住宅の広さは?

A. 1人 4畳半 1部屋  
2人以上 2部屋

Q. 物資の中でありがたがっているのは?

A. 食料。県境までしかこなかったため困窮したから。

Q. 仮設住宅の人は運動している?

A. 集会所では毎日している。卓球も投げ、カラオケ あみもの。あきせむではスポーツをしている。

## ★ ボランティア活動

### のらとも農園とは?

被災後、仮設住宅の方が気持ちをまぎらわすために始めた農園です。  
最初は廣畑さん一で始めましたが、徐々に仮設住宅のおじいさんやおばあさんも手伝うようになり、現在では育てた作物を首都圏に出荷しています。



## 廣畑さんの話

○ 震災後3日間はおせんべい3枚で過ごした。

○ 震災を知るには、実際現場に来ていただいて、自分の目で見て感じてほしい。



## ★ 感想

仮設住宅の方は、来い前向きに生活している方が多いと驚きました。日常生活が送れることに感謝しています。

仮設住宅で過ごしている人々の生活を聞いて、普通の生活がいつか手に入るのをみんな楽しみにしている。1日1日を大切に生きてほしい。

仮設住宅の心が日々を暗く過ごしているわけではないこと、分かります。私は、仮設住宅の方にできるだけの生活に近づいてほしいと思います。

仮設住宅の人はスポーツ、祭り、交流が大好きで生活している。じょうはみんなPC空想と夢を話している。

話に聞いていたよりも楽しく、明るく過ごしているようでした。大変な思いをしながらも今を生きている事に励まされました。

### のらとも農園引越のお祝い

除染にともない引越することになったのらとも農園でレタが運びました。

### ○ 感想

- ・辛い作業だったが、震災後はもっと忙しかたのせうと感じた。
- ・雨の中の作業が、津波の後の作業にこんな感じだったのかと思った。
- ・作業後、廣畑さんの笑顔を見て、やりがいを感じた。

震災から4年経って初めて福島に行きました。福島の現状は思っていた以上にすごく悲しいものでした。除染作業が未だ続いている地域や大切なものが残っているのに入ることができない場所。原発事故が起こり、街はゴーストタウン化してしまい、私たちが見た光景はあの日のままの状態でした。私は何も言葉が出ませんでした。

しかし、悲しいことだけではなく、明るい未来、希望のために頑張っている方々も多くいました。福島のためにというひとりひとりの行動があとに繋がり、その繋がりには福島を被災前に戻すという復興よりも何か大きくて明るい未来へとつき進んでいるのではないかと私は感じました。

この現状を伝えることも大切ですが、私は福島に実際に行って見てあの想いを感じてもらいたいです。その場に行ってみないと現状はわからないと思ったからです。

(社会福祉学部：2年)

被災地や放射線について勉強ができ、被災地について知ることができるということで参加しようと思いました。しかし、やることはあるのだろうか、震災の影響を受けていない私が参加していいのだろうかとギリギリまで悩みながら参加しました。今回、様々な方々と話をしたり聞いたりして、地元の皆さんが「来てくれて嬉しい」と言ってくださり、その悩みも吹き飛びました。南相馬市小高地区のNPOの方々が、実際に目で見て被災地を見続けること、そしてそれを伝えることが自分たちにできることだということをお話ししていました。その話を聞いて、今回1回きりではなく、絶えず被災地を訪れることの大切さに気付かされました。今後もこの経験を生かしていけるように積極的に参加していきたいと思いました。

(経済学部：3年)

私が一番印象に残った言葉は、「来てくれるだけで嬉しい」と言ってくださった言葉です。私は正直ボランティアに行って現地の人には本当に嬉しいのだろうか、自己満足になっていないだろうかと思っていました。しかし、行ったかいがあったと思いました。この現状を打破すること、放射線を一刻も早く取り除くこと、原発に代わるエネルギー生産方法を生み出すこと、そんな大それたことはできません。今私たちにできることはこの現状を忘れないことだと思います。

福島の人たちは元気で明るかったです。私はこのツアーを通し、今、一生懸命勉強して自ら行動を起こせる人になりたいと思いました。

(地球環境科学部：1年)

今回のボランティアツアーで最も痛感したことは「自分たちが生活している当たり前の生活がこんなにも充実している生活を送っている」ということです。

特に福島では原発の関係でいまだに公共交通が動いていなかったり普通に生活できていない地域がたくさんあります。それに比べればバスや電車等が時間通りに動く、帰る場所がきちんとありいつでも帰れる状態にある生活がいかに幸せかというのを痛感できました。また自分たちに何ができるのかを今一度見直す必要があるとも思いました。

(社会福祉学部：2年)

今回福島に行き、それぞれの地域で感じていること、思うこと、そこでの試み、全てが違っていた。こんなにも違うのかと驚いた。

いわきでは今まで以上に発展させようとしている人がいた、広野には以前と同じような生活をと願う人がいた、富岡町には人すらおらず震災当時のままの町があった。あの日から得たものが違うように、これからをどう考えるのかも、それぞれの地で違っていた。それを見て、尊敬の念を抱いたり共感したりもした。

ボランティアから帰ってきて、自分にできることは何かを考えたけれど、具体的には思いつかなかった。けれど、毎日じゃなくても、考え続けることが大切なのだと思った。

(法学部：3年)

## 2015年度震災復興応援

### ボランティアツアーin福島 報告書

発行日 2016年3月1日

発行 立正大学社会福祉学部ボランティア活動推進センター

印刷 有限会社 ビーンネット